



日本行記  
自第十四卷  
止第十五卷

洋学文庫  
文庫 8  
C 334  
4







茅田篇

○ 文人誌寫

○ 此後鴻の位並此鴻と初見て 開せらるる(氏此鴻の貴統  
 おもひ及び文素あまの、ロビコリ、モルニリト、人とおんゆと  
 歌をまじ、スタナレト、鴻よけ、稻穂の陣とふま、舟舳、  
 浦りあまの)

才六月十日海申

才十四の平の、才、文人の誌寫の名、あま、舟、け、群、の、壯



俸子七夜よりして早の首府江尾を去りて強くといふより叙の俸  
夜たあり 此群島の 以のこゝるまを海山はたぐ鯨鯨

船の薪木とありて船をたためし時、此港へ船のみあり ○英吉利の由

カラスレ、移るゝ其船の二の顆伴とき、其船と避けて此港の林中に潜み

其い其船の揚帆とをりし時と隠れ居りて、いふ、百二十一年の事とあり

り ○其船揚帆とをりし時其船と避けて、其船をいひ、而して其船を係

持てる船のよ、ロ、シリ、セル、ウー、人のめ、初めて移るゝの規則と定めり ○此島は

ぬき、代りて水多し、る且、鹿、寺、類、法、樹、木、橙、花、細、草、多、く、在、り

え ○此取島の小湊中、い、魚、城、の、め、く、某、り、而、して、其、海、濱、の、岸、ら、ふ

ら、ぬ、は、鯨、船、航、業、り、多、し、但、其、船、月、之、明、り、る、其、市、と、海、濱、の、砂

中、は、唐、も、の、あり ○是、と、其、か、の、法、極、氏、の、其、食、料、は、ま、り、加、え、時、

此、所、へ、港、に、鯨、船、航、業、と、多、し、と、い、ひ、き、り ○其、法、極、氏、は、其

岸、を、と、り、鯨、船、航、業、の、法、器、械、物、を、鶴、島、松、二、の、島、に、及、び、い、き、ぬ、ぬ、の、也

件、に、及、ぶ、と、あり ○島、松、は、越、り、て、其、松、と、あり、船、名、は、善、名、と、あり ○

此、群、島、中、の、他、の、島、は、古、昔、二、の、中、羊、し、お、ち、り、ぬ、り、但、其、中、羊、は、昔、は、此、島

島、に、と、り、これ、も、亦、此、島、と、あり、法、極、氏、其、肉、と、あり、此、島、の、名、は、其、肉、と、

しつこくおれり

ゆいふれも共サフスレイ人の外け番和の徒植氏を倒しはつとまきりゆれり  
其代りよ他人より住まはる但し其内二の人を其の地つとまきり○はつと  
オントウサス徒つとまきりよ人の男よ及び婦人なれり而して其今ハ群島中  
の夫あつたよ大略軍人其の中人の人住まはるゆれり

おんロイト港を既よ八百七十七年英吉利船あり及び八百八十八年魯西亜  
船のありはちよ八百八十八年よつてシルエトウアルトへ入るの指揮せる英  
吉利のブリフキ船スユルフ元号を海のはは及び陸地と測量まきりゆれり

事なり○是よ 割居せ細巻の地まよの島大あつたの首港とオントウ

ルセイと稱するは此群島の一面の大島よフナール島、フユクランド島及びス  
クスント島の名とすなり○其島初の島ハ群島の最も南にあり其島の  
島の群島の最北にあり此島の中より及び其島傍よるまよくの徒つと  
徒岩在徒暗礁及び御長よ徒砂海あり

此徒島の周巴を版よ奪り運送囊書中よまよの階梯の前後と叙せり而  
して我々破とらんと欲して土財とてはよおんロイト港の西湾ハ船と  
りせ一時ハ述、オフへハハイトニ或ハサルフユルク、以上破羅の島も名乗あり  
巴の地名

一湖中は特絶せしやく重所なりしれ  
○その穴番めして廣く且港の  
内國を高く急峻なりて画島の如く形せる岩位矮し然る但し其岩位  
を崖通底の廣き二河海と開けり此港の中央より其形するまれのキラク  
の岩礁は改羅巴の地名の岩礁は狭しきまらるる

しキフスル先の如く二の大砲と備へて以て敵の奪ふ可らざるやかく成りし  
處きなり○此港の南の方の地はまき密林の生る園とて男をり  
其島の御邑より廣き草の豊饒の由定とてたういり稍くまき群れて甘  
藷と植へる芋田畑芋田畑等の中央より樹林は陰れ此植氏の

島をりしり

此港の時者ありしは此島より生い茂れる島上の山林は鮮色あり田  
如し海濱は活いしゆきなり地はなほ穴番より形も地は岩礁あり前  
のカラート石と其より秀と競ふて甚富きを言なり但し其カラート石は  
湖より由りし所は洞穴の穴と鑿ちて其穴のまき草澤のやうな午射の日光の  
映射よりし余る本島の傳説の史蹟後世とていひゆす○此島の海  
濱は穴番ある法の具として布き海せり而して其水の冷るや中樹の  
方の肉眼をるかききよむるやその如く其居れり其島の輪も其

りし彩草冊瑚を天監の海水申す枝とむらて陰客は其天羅あり  
りとあしとあんと歌をさぐくをあり ○ 船時のる船舟の船と歌  
し其保所と歌説して道徳書の才知と物との区別とを穿鑿をさぐり  
沈りて而して道徳と自ら悟る時其徳を懐飾し其心養はる草木  
の世界斜陽の光り而して命を新むせられ 故文は一國の徳を  
引起して蒼然たる暮ぬの四方に記り海も岩礁も是も皆悉く陰  
暈をさぐりむらむ ○ 物も余眼目と地平儀の方角いむれ一國の  
波より昇り或は余の舟も木舟の洞も法明も且も皆悉く光りて

これに共なる精神として衆列をいひて其物の徳と其記し  
む道徳の情徳たるものさるあり

ちをロヒンサンハクシト人の世に余ありとせう後徳を奪い世人の知れぬアシキ  
サレセルキルク人をへん地の海岸ありてイニシハフエルナニス流の物業あり  
よして流れ其徳と新れはる流し其徳を在位せし物も亦なりて或は歸世  
いと難いゆに余今初て十分も余はせり ○ 余今初て十分も余はせり  
たゆして二の好業の坊外まきいし時其徳を奪せしゆられ余は其徳  
行をさぐりて其徳をさぐり ○ 余は流りて其徳を奪せしゆられ余は其徳

都羅の表のあし生せりるはるを種々の向してせり二箇の山と  
あり而して此の川中央にお合とて橋舟と八十人力を保はまき此の橋の  
川とありり○此の橋の物柄と其の産田よりあるは川岸より三ヶ所  
あり其の橋と結して其のよおれとて生れせり但し其一人をスウハイラフ他の  
一人をマキキーセン橋の合あり○此の固固の画の心と感感せりし力と  
して其心と束縛されかく是り而して其自らの物めと見れて此の橋  
る谷のりよ候存せんもの思ひ記れり此れも神靈其よは此の合あり  
及ひ力ととあり一問の事世人と其よ生活はるるを問はると要とて其合あり

のみとて奪い思いと改めたり

第六月二十日

朝尚事夜の明けきりあり秋事い港の南の端よ名存せりけり  
ムルハイフルトクイロル名指揮者の位とありたり而して其よ上陸せり其の由更  
及ひ海軍の歩卒と降くの外其物の浪中の勢のみよ志之れり着  
岸せり場あり其れは山の流れば其の心ありけり其の夜に秋事と  
陸せり其の道傍の表の御事也且秋事の表ありて一箇の橋  
本の林とありて其の道ありり○其の道は其の道ありてスプリング



コフランシシ 樹の生るる地この草木の生い茂れる潤滑なり 地を耕の  
行と悩むるなり ○ 今中へく吊り上りし日し 柘植の辛密せる地は  
度きられて其えと漏るるのちたまりり 而して 秋多此種中の園ある  
間道して其も建とるるなり 秋多辛密或は辛密あるとんあの新種  
として 近きあるは亦川の流るる地は 地を耕るる地は 谷の中のみ  
らしむるもあはる 秋多辛密は 近きあるなり 地を耕るる地は 辛密  
せり ンテニクス 或は秋多アサナスの地は 秋多辛密は 秋多辛密は 秋多辛密は  
りき入からりりり 秋多辛密は 秋多辛密は 秋多辛密は 秋多辛密は

其花の角相付るし 其葉の由りて 地方をまきり 而して 秋多辛密の地は  
柘植樹とて 地を耕るる地は 秋多辛密の地は 秋多辛密の地は 秋多辛密の地は  
りき入からりりり 秋多辛密は 秋多辛密は 秋多辛密は 秋多辛密は  
管とて 地を耕るる地は 秋多辛密の地は 秋多辛密の地は 秋多辛密の地は  
其地を 秋多辛密の地は 秋多辛密の地は 秋多辛密の地は 秋多辛密の地は  
秋多辛密の地は 秋多辛密の地は 秋多辛密の地は 秋多辛密の地は 秋多辛密の地は  
而して 秋多辛密の地は 秋多辛密の地は 秋多辛密の地は 秋多辛密の地は 秋多辛密の地は  
秋多辛密の地は 秋多辛密の地は 秋多辛密の地は 秋多辛密の地は 秋多辛密の地は



飯と製茶を種れ此を新町の邊とありし海軍を港の邊とさせしより  
申て御子の言に依りて此の會を申て種も御子の言に依りて此の會  
ありし圍新町をいふなり ○ 此夜は種も初めて此の島の邊の邊  
に達せり種も知らずなりし免れし後と奇射せり而して十時を死にせり  
是れを再び此の島にありし

聖言全る地の物と事よスタナルと種も此の邊の陣とありしとナカカ号船  
の二人の歌は連きありし ○ 我等のためよ老ひた徒徒氏二人を  
迎農砲と事よ（持ちありし） ○ 小れロイト、淡とて申す種れ海軍と

此の方へありし ○ 種れハール、淡及びアエククエド、淡の西方より一隊の  
山岩とてこの島を他一其の山岩のスタメント、淡の東方より一隊の  
化し海軍と事よまた新島の量をも事よ申して物、クレイトスコイア、  
これとこれ、吾れ言ひて、此の島にありし、種れ初め、種れ一隊、  
事よと事よ、而して此の島を日淡の島とせり ○  
中よ於りありし時、其の量も事よと今一隊新島と地あり ○ 小れト、  
ルロイト、淡よりスケストン、種れ初め、全島此の島の量をも事よ画く人の言  
はるる、事よと事よ、種れ連て、種れ初め、画く人の言と画く人の言 ○  
種れ初め、一は淡、一は事よと事よ、事よと事よ、事よと事よ、事よと事よ、  
種れ初め、一は淡、一は事よと事よ、事よと事よ、事よと事よ、事よと事よ、

此物も法に違ひし時定礎の頂を枕を掩ふと云ふれども但此物枕を  
掩ふと云ふるの語言と物々(きあり)

秋もたゞ其自色の紙を撰ひて男と喬一擧ちしり一余の其九羽(き)に  
而して漸く其頂より下りし時凡百物の紙解のやま平或は平紙解せ  
ゆきと云ふ一但し其中の二紙を其より肥大なる仕せしり○印時  
余其方より紙けり物れ共物時のるを其より其二紙に引れし打んと決ま  
まりし而して物時休意は(き)と云ふと要(き)物よ余の双より書しり是れ  
一ハ努力しと云ふ擧ちしり一ハ好き物と擧人し歎と云ふれり

○物れ共此物おとんこ(き)と云ふと云ひしつ違ひ決定は(き)と  
要せし故よ余其の紙と云ふ上り敷射せり物れ其浮や仕せし平の  
紙より其云物れ上のやと云は紙と云はれり○金擧ちしと云ひ(き)と云ふ  
て殆ど其き子換のきとの讀書と云はせしや其感と云はせり紙杜氏のき  
人を其大羽(き)と云ふと云は物れわらう此物と云は紙太(き)一のゆきと云はりたり  
但し此物ハ余の言其紙の紙解と云はせし(き)と云ふ○此物ハ紙解せし(き)と云ふ  
余之と云は紙解と云は(き)と云ふ○此物ハ(き)と云ふ、其解の(き)と云は紙解  
し一擧ちしと云ふ余之れと日本製紙の紙と云ふ(き)と云ふ、其解の(き)と云は紙と云は

道より此様の事柄もまよ洞行と申しされり。○此の江戸を昨より  
言中たつと申しされ、種は此種と申す事と申し、實とあるは是れ  
我等一二の船と捕らたれ、月のはえと信じて、但し其船は卵と申す所  
むたの漏網の時海濱と匍匐する者あり、我等は所を智恵の口と名の  
船と獲たり、但し一船のきさい、言辯し、あぐらさうり、而して種は  
とくは方物と申し、われ、其船は半水中と捕らてあり。此船と申  
漢は川奉行のこれと擔ひ、いふ人、いふ人、と申し、  
此船のしとあり、種を、其船と巻きて、お之船と、静に、申す。○

漢の、茶と一疋、窓さし、海より我等を、扱の、いふ、と、而、他の、方角、の、い  
徳と、探索、する、ため、いふ、せり。○此船は、余、此、海、の、最、も、き、や、い、わ、い、  
り、と、目的、を、い、り、而、して、急、き、落、く、い、り、い、り、い、り、い、り、い、り、い、り、い、り、  
あ、り、り、智、恵、の、智、恵、と、い、り、い、り、い、り、い、り、い、り、い、り、い、り、い、り、  
絶、た、り、い、り、其、境、烟、を、い、り、い、り、い、り、い、り、い、り、い、り、い、り、  
場所、と、ある、は、い、り、い、り、○余、此、所、より、い、り、い、り、い、り、い、り、い、り、  
と、要、と、い、り、い、り、い、り、い、り、い、り、い、り、い、り、い、り、い、り、  
此、は、余、の、い、り、い、り、い、り、い、り、い、り、い、り、い、り、い、り、い、り、

余の職務と稱せしむるなり ○ 余の前面より始り余心中に取極の鴉片  
現の世をどうめく当且ツスタブレト、鴉の画風物とあせり海濱の路をよき  
着し裝飾せし草木のつる國を以て天壽の地と成りかき其勢と如  
くよは此鴉片極止を敷るはの地羊の敷十部と文せるといふなり

余以下の法谷を控手間あがり可しと其書は鴉のまじのこ旭之れと  
四より余レシ<sup>レ</sup>、<sup>レ</sup>谷のそ教を<sup>レ</sup>余<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>球<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>亞<sup>レ</sup>利  
加<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>はと<sup>レ</sup>觀<sup>レ</sup>設<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>路<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>年<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>なり ○ 其<sup>レ</sup>時  
余が心中に此鴉片と當りあせりしなりよ吾の疑ひ記れし物れも余其

此地球の四角のより多く周うてはち一年はれては一日大宇海の他の境界  
よりあせりしなりよ多く考へるなり ○ 余れ其のよりよはては此鴉  
片たり而して余れははハルスタードを<sup>レ</sup>遊<sup>レ</sup>りて<sup>レ</sup>再<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>景  
多とん<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>とお像せり而して此考は余の心中の聲を聞せり余は其まよ  
物とほ其のよりと考へるは我等の此度の企のし調ひ成乾とせりしと  
とあふけ余が夾夾するして岩礁よ<sup>レ</sup>激<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>なり余れは<sup>レ</sup>純<sup>レ</sup>粋<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>テイ<sup>レ</sup>ロ<sup>レ</sup>ン  
ル<sup>レ</sup>イ<sup>レ</sup>ユ<sup>レ</sup>ク<sup>レ</sup>マ<sup>レ</sup>ル<sup>レ</sup> <sup>詳</sup>多<sup>く</sup>と<sup>呼</sup>ぶ<sup>る</sup>なり ○ 物れも此何じり<sup>レ</sup>声<sup>レ</sup>と<sup>余</sup>れ  
甚しく疑ふと生るる物の中よりあせりしなりハ<sup>レ</sup>而<sup>レ</sup>時<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>我<sup>レ</sup>が<sup>レ</sup>港<sup>レ</sup>木<sup>レ</sup>の

ストコイクケリス



星洲の他田形師の状表と以て上海より此所へ来りし事

第十九篇

第二曲の琉球土産

- 那覇府と名探る
- 其家屋の製造
- 租税の事
- 初めり日本人の通遇
- 上人の性災
- 舟中の事
- 古城
- 琉球の法
- 日本子部

那覇 琉球 港不  
 のまて艦を修補の且此業合料及び水と舟よらんと  
 費セー 其号に於て細技と初めたり  
 ○ 其意として此所の事



画の如の景又あつち中より其位飾は並別も格梁及び他のあをうも  
意の形状湛湖の粉みうして並列も緑林の松樹マニスウツス樹何  
てリハノン<sup>正由垂都光格</sup><sub>中の山名</sub>とあれも支の景は外くして余學を益とあつ  
ものあつち○土人々其装の衣裳とる一其生衣の款をもあつち  
種々の漆油のつちるたつちんと馬の装の漆は必要のあつちり  
此地の景況と字状と初め文字とあつち直くつちりつちりつちりつちり  
直とまわつち○土人あつち換とあつち字とせしあつち同ほ其目録の  
あつち分として名馬りしと示すあつち○此良美な、等々、他種

今とて其所をくつちりつちりつちりつちりつちりつちりつちりつちりつちり  
門ノ要牖と成陸とつちり

河より其府の一部は、秋方とあつちて其とせしあつち○中  
陽の夜中毎つちりして朱明より信佐機の子の某君と昔は陸より川は信佐  
水多と揃せり○これよりと那覇府とあつち曲して日没よりあつち海  
府の裡西流のあつち多きや、富族の住柄りて人ものや○市中ハ  
今くか、其其あるの門ノ庭園と成をくつちりつちり○これとあつち  
此景園、たく、朱の盜賊とあつちつちりつちり 新事とあつちの元益つちりて其

開方一部中より与り

世集より市より向ふぬ市より廣場より十八の宮壁あり圍  
りて而して其壁中玉門と設けり ○ 其壁は泥の平地あり其樹の  
竹と瓦櫃とを其壁より順列せり東部のうち部は木造りて其壁より  
り造法あり ○ 東は一個或は個の市店あり其壁より造りて其壁備  
を几て索して壁面ありて壁よりとれと梯入り又階をいへり而して  
多の皆廣場と稱して此れ ○ 又其壁より油式宮のや色は  
赤又よれと記せり ○ 若し其壁より壁の壁よりありて此れ

た其壁より此れは壁と申されと微して其居住より外より其のものを  
とていへりて其壁外より其のものとていへり

我等よりこの物の部より其のものとて開きたるものにて新又関と廣りんと  
ありて其壁より其の市中よりあり ○ 其壁の室あり其壁より其の遊  
園よりありて其壁より其の佳景ありて其壁の装飾ありて其壁あり

○ 庭の山中より盆池ありて其周圍より橋及ひ法鏡の石あり其の  
水中より金魚あり ○ 又より其壁より其の例より其の  
壁よりあり ○ 其石と壁より其の序より其の山あり其の輕中より

眠せり○過ぎさかりりよカリスルテン初見拾の香を此の事婦人は過す

寝る皆浅きを携へさうしきうしきれい房は奥用よりしきと一様

うほきぬ新の言起れるは実は一宮のきゆえとされし此眠りた

きちえいしきい定めて寝るう人よと夢の思我等のぬれし己よき

りたれいあうし時のぬくゆふゆきれり実よと懼と知き我人の

あのをとれいしと世善良ある鴻人は知ししきいぬいほれと知え

とくいと那

我も府の伝き所刻りしゆいゆい寝いてゆふしき多ゆふ人よを替

高貴せり

卑脚の婦女ねり人此は極肉多れゆ葉の豆芋百公アウキエレケ

ン等と我たる竜及い序のほよなせり其この高婦は我もとて此

曲れ其地のものはおたせし我士の害と人種とものよひ反とんこ

曲れいものい述しゆなせり○止カリスの二種りうられ家よとぬの物

とん中○此甘カリス四角屋うと丸リンビエリ此のカリスの天サあかり

教おししゆ業し或は人らとて其律はは佳ありき

まうり候よ勤きしき鶴多の日亭ねり此船はけをりゆ来十六隻乃が

千夏入付せーあり 此の如く始めて日本のまゝの色遇せうらん二方と  
其常中より上とをり奉人あくとおれり ○ 其法の一神と免利し油を  
客上柳法しまれし油と改らんと結末を其法に傳られしとて用ひ  
て柳法せり ○ 衣法は爲き強くと透明やうと布の灰又及び白の四角  
あゝ幅度くして無たし油のけきたゞを衣うして又色の日布と改れり  
おと又アノエト谷のブライノ後一袖より肩を曲くりして着るゝと燈  
とおちり ○ 其三方の邦を其常中より一個オウストラア、中よをよお法の  
附きたる短き燈燭一個より法列衣の燈子袋一個を寄いしよよ法製りよ

塗せり 筆と指のたう ○ 此人 我手は法と名をいしと 思きまれり 白紙 我手  
又其あゝあせり ○ 此日本のまゝ人の刀、我流球と初て足たる兵部まき  
我手又より此日本の形よひよ奉及ひはとて法を伝せられたる ○ 伝て日本の  
男あゝあゝく粗なれしと我わうして上佳勝あり 妙なり  
又より雨りと傳て家と法と傳へて其法一昔を 法流 予れちあり  
又其常の法地は因法して法を傳せりとて此地の法といたり ○  
又其常より一人の法を其主人と傳ひ別れし人あまの法の習習とて  
傳の如く移ししとて既にまれとてあまの法といひしとて其法を傳て

其の如きし世間の力役とあるもの他邦の如くは其民の豊かうと云ふた  
り而して我法教を以て之れと教養の如く其位階の如く其高き者の大なる  
酒を飲みたり其の如く其位階にて煙を喫み茶を飲み酒を飲み其位階  
其位階と其位階と其位階の各異を區分せしもの如く其位階を授け  
たり

夫人を以て其性温厚親わたりて友愛あり○予は其馮中より其位階の  
其の人と其位階と其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く

其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く○曰と

其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く  
其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く

其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く

其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く

其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く

其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く

其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く

其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く

其位階の如く

其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く

其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く

其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く○曰と

其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く

其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く

其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く

其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く

其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く

其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く

其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く其位階の如く

再田琉球も在りて予其東方に在る四城と撰む程の事といふ○予亦其地を  
尋ねて瓦礫の堆積を其水に止して用ふるもの一ありしを記す○彼人  
其地を到る能く予を教ふべし然れども其地を到る亦容易なるべし

○予其下流の那覇朝也後川に流れて舟よりくみりて其地を尋る

其行路の狭き色の丘として其地を尋る石一部は森林と撰むべし亦  
時として低なる稲田ありて此地方を宜しとて緩流せり而して其川  
中は二個掘りたる水田ありて此地方も一此地を尋る水田ありて  
稲田ありて此林中に隈りて二村ありて其地を尋る

予は着るなりて其地を尋る一は備前の状なりて其地を尋る海を尋るもの  
の地一丈にして廣く予を感す一は海を尋る長く自碑として訪ひたる四城は  
なり

其城川の勾曲せりて其地を尋る此角よりて凡そ人の言ふは建壁を  
而して其地を尋る一は備前の状なりて其地を尋る海を尋るもの  
りて二個環壁の地ありて其地を尋る一は海を尋る長く自碑として訪ひたる四城は  
客は瓦礫の堆積を其水に止して用ふるもの一ありしを記す○川は對せりて其地を  
尋る海を尋る一は備前の状なりて其地を尋る海を尋るもの

つらなるおぼるせう○ 赤坂上其町の庚辰或つらなる已上音里の杉城の  
ふと紀載せる降に設けらるる其ハスナシ連築凡方町の人民されど亦方  
實に造らるるものいふこといふ事は也入せう○ 才二の環壁を門の左突  
半を雲霧に其門の右に雲霧破れしれも其瓦礫堆し生きたる樹  
根をれと仔細しと後述せしり

極日破岸の産地を考く樹木蔓生を物れも其園外の荒涼として一物  
なきはなとけし一個の門となし物も其戸密閉せしとて中をれと考く  
たり 其産地の守りよるる凡四人の守りし其よきサナシ人産しナシの

四角より中凹あり其の上より其那の文字あり其匠傳の地より杭  
あり其杭は香と今なき物に破れしとを考く其物に其那の人をれね  
は判し物も同一しを而して門は其よき一はあり其れは人高は  
到りて物と奉し礼ねと考くしとてたり

今琉球の山法とたし記せし

コココオレウケウリーウキーウリエーキエウ、又をリエーキエーの海  
り奉りされと記しは其日守と其那も一と其由よき其と記せし  
の文も其れと記しと記せしあり 其由ハ其六鴻しと人されと

別ちそをい脚ち山北中山のい山南あり

千七百十九年よ使節ありてい鴻はありて支那の學士、スーオアコウシグ共

性時の山史と考せり此史と千八百七年よ於て甲比舟、マキスウエルル人英吉利

のスカット船種アルセス船名駕して探索の爲に航海せる記述中よ記載

せり

琉球の史よ曰其開闢せりてき渾純中よ一男一女あり此人とオモイメイキイ

と云 ○此三人二男一女とせり ○其婦男の名とチーユ、メン、三(天の小

婦男)とて琉球の初世の王あり此一人は、後伯の祖とあり此三人の俗裔

の庶民とあり ○此三人の其妻とられりいたりや其子をも載せり ○

才一女をされと天孫と云才二女をされと水鏡と云 ○千イウシ、死せり

後其故おありて二十五年と合せり一乃七の八百零二年也 此小美

定よ據れ此年教へる言十七年よ其年とありたり、シエ、テイ、王の時よと

云く ○初のとき虚徒ありと此小人を必要の者とせり ○其小

の時兼よ據りてい鴻とに開闢言百年代よ世よたれりて其此支那の言

シテ、帝けお人よ令ありと令せりて人其命と拒たり

支那のアモイ、オウキ、ウ地名と海初と此をたれり其年二万人と載り琉



球の事として陸軍は勝利といふ其府と燒き土人五万人を捕つたといふ  
支那は成吉思汗

よつと七年は於て別ある支那のシトコシーといふ事、ホウキークと云ふ  
事、その人、常に二隊、私と懐けり。返り、黄、漢、よび、て、掃、は、は○其、ゆ、ち、ち  
七、二、多、は、於、て、ホ、ン、グ、オ、ウ、帝、統、球、の、ソ、オ、ウ、ホ、ウ、此、統、球、ト、ラ、イ、ロ、ウ、、皇、の、  
よ、有、司、と、ま、せ、り、ま、れ、は、西、民、の、、親、、同、、と、、こ、、小、、部、、は、、別、、れ、、ま、、れ、、い、、ま、、る、○は、、か、、り、  
其、使、命、と、辱、め、を、い、漢、、中、、の、、友、、人、、と、、携、、へ、、て、、支、、那、、へ、、り、、其、、ち、、と、、也、、と、、り、○  
統、球、は、多、、と、、支、、那、、と、、善、、く、、れ、、こ、、、、あ、、の、、管、、治、、と、、也、、と、、り、、あ、、た、、り、

○あれとて其代の上王カンベ及びカンノウも其は支那帝の徳に従せり○  
支那の之族、字人其比、カノウリ、とて今の那覇朝の他は福住、家、よ、支那の  
書を、書冊及び其の書と送りり○統球のま、人、族、の、み、身、と、南、京、を、拓  
きて支那の國費といふとせんといふ事、後、り

アウハシ王在位の一、其、統、球、と、合、せ、て、王、作、し、ま、り、い、、ら、、は、、水、、く、、ま、、れ、、と、、流、  
せり○いふ、亦、支、那、の、日、、本、、を、、あ、、り、、し、、て、、其、、あ、、ら、、し、、有、、意、、の、、支、、那、、と、、あ、、せ、、り、○

日本の方が、あ、り、キ、、ラ、、イ、、コ、、フ、、と、、太、、岡、、統、、球、、の、、名、、カ、、レ、、リ、、ニ、、シ、、テ、、其、、令、、し、、て、、金、、と、、日、、本、、を、  
従せし、あ、、ら、、し、、も、、知、、り、、は、、其、、令、、を、、拒、、こ、、た、、り、○支、、那、、に、、於、、て、、日、、本、、人、、海、、船、、を、

りて上陸しると日本を攻め遣せしむる日本を行きて其を奪取せしむる  
陣せしむる人々を驚かししむるは其の事なり

近付まじり難朝王支那帝しむるは其の事なり其の事なり其の事なり  
草方り且ち此の事なり使節を遣はしむるは其の事なり其の事なり

○カニクキ王は改葬とせしむるは其の事なり其の事なり其の事なり

○大伯多事は其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり

流ししむるは其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり

兵とせしむるは其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり

従て其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり  
佛像を破壊ししむるは其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり

らしたる其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり

りしむるは其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり

りしむるは其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり

甚だしむるは其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり

肺國流ししむるは其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり

をりしむるは其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり

○ホレカニシ  
男女婚を制すの外あり

費利キナ有向の湯俸子ハ府庫方々を以ての貨幣ヲ貸し付ハ法利ナ  
別位洞湯硫黄及ハ凡高の物貸しあり

此書ハ内ヨリ一語の記載モ(き)る所ナク、  
國喪の時大禮と新主踐  
祚ヲ於その典れり此を(旨)きり付あり切要の事勢ハ何れも  
事と首々

此は鴻の名号者此地ノ於て稱を以て強んと同し(き)る所ナク、  
れら最是なるト又ハ明々○洋人此所稱をリウキウと名附て英  
國地必トハロテロラト稱を以て後リウキウと名附く千七百十七年ノ於て

此鴻と稱常一たり甲比丹をルルをレウケウと名附く拂西の地必  
ム又リウキウと稱せ

明和と稱す海邊ノ繁要の地我と決りての如く此地地方は

記



